

令和4年度 第1回 女性・若者活躍推進会議 議事録

日 時 令和4年6月10日（金）13:30～15:30

会 場 TKP ガーデンシティ PREMIUM 仙台西口 ホール 6B

出席者 【委 員】 仙台市長、まちづくり政策局長、市民局長、健康福祉局長、子供未来局長、
経済局長、教育長

【外部出席者】・ひきこもりLadyの会 代表 堀江 美恵子 氏

・宮城野区BBS会 副会長 森 聖義 氏

・NPO 法人アスイク 代表理事 大橋 雄介 氏

〃 相談支援ユニットリーダー 吉田 彩乃 氏

・NPO 法人Switch 理事・事務局長 今野 純太郎 氏

〃 理事・法人事業統括ディレクター 小関 美江 氏

事務局 市民局次長、同局市民活躍推進部長、同局男女共同参画課長、同課主幹、同課担当者

次 第

- 1 開会
- 2 市長挨拶
- 3 出席者紹介
- 4 各団体からのご説明
 - ・団体の活動状況
 - ・課題認識
- 5 意見交換
- 6 閉会

1 開会

○男女共同参画課長

- ・ただ今より、令和4年度 第1回 女性・若者活躍推進会議を開催する。

2 市長挨拶

○男女共同参画課長

- ・はじめに、当会議の座長である郡市長よりご挨拶申し上げます。

○市長

- ・お集まりの各団体の皆様、本日はお忙しい中、女性・若者活躍推進会議にご参加いただき感謝申し上げます。わたし自身、皆様から直接お話を伺いし、意見交換ができることを、とても楽しみにしていました。
- ・今日は、市役所からは関係局長が出席している。局長がこのように集まって話を聞かせていただく機会というのは多くはない。そういう意味で、この会議の特別さをご認識いただければ。
- ・会議に先立ち、わたしが、どのような想いでこの会議を立ち上げることとしたのかをお話しさせていただきます。
- ・新型コロナウイルスとの戦いが始まってからまもなく2年半となろうとしている。コロナは、社会経済にも市民生活にも大きな影響を及ぼし、さらに、市民には対面での接触の制限などさまざまな制約が課せられた。このことが、市民協働あるいは市民活動に大きな影響を及ぼし、この街の持っている活力にも大きな影を落としているのではないかと思うところである。ひるがえって言えば、仙台の元気を作っていたのは、市民の皆さまの様々な活動だった、まさに人が街を作っていたのだと再認識しているところ。
- ・そのような中で、女性や若者、社会的弱者と言われる方など、困難を抱えている方々への支援も届きにくい状況となっており、ご苦勞をお掛けしているのではないかと危惧している。
- ・その皆さんたちに、いろんな方々が関わり合ってエンパワーメントしていくことが重要で、その人がその人らしい姿を実現できるような環境を整えてまいりたいと考えている。
- ・現場で常日頃から支援されている方々の率直なご意見を聞かせていただき、今後の施策に反映させてまいりたいと思い、会議を立ち上げさせていただきました。
- ・本日は限られた時間ではあるがよろしくお願ひしたい。

3 出席者紹介

○男女共同参画課長

- ・次に、本日の出席者をご紹介します。はじめに参加団体の皆様をご紹介します。
- ・ひきこもりLadyの会 代表の堀江 美恵子様。ひきこもりLadyの会は、ひきこもりや生きづらさを抱える女性の居場所づくりをされている団体である。
- ・宮城野区BBS会 副会長の森 聖義様。宮城野区BBS会は非行少年や生きづらさを抱える少年たちに寄り添う活動を行っているボランティア団体である。
- ・NPO法人アスイク 代表理事の大橋 雄介様。同じく相談支援ユニットリーダーの吉田 彩乃様。NPO法人アスイクは、生活困窮世帯の学習・生活支援をはじめ、子ども・若者の支援を幅広く行っている団体である。

- ・NPO 法人 Switch 理事で事務局長の今野 純太郎様。同じく理事で法人事業総括ディレクターの小関 美江様。NPO 法人 Switch は、主に若者の就労支援を行っている団体で、障害者の就労移行支援も行っている団体である。
- ・続いて、市の出席者をご紹介する。

《市長及び参加局長等について役職と名前を順番に紹介》

- ・それでは各団体からのご説明に移りたい。ここからは、座長である市長が進行する。

4 各団体からのご説明

○市長

- ・それでは早速、各団体の皆様から、団体の活動状況と課題認識などについてご説明いただきたい。
- ・はじめに、ひきこもり Lady の会にお願いしたい。

○ひきこもり Lady の会 堀江氏

- ・会としての活動を初めて2年目であり、このような場でお話しできるほどの活動はまだまだできていないが、ひきこもりの女性の存在を知っていただければ。
- ・ひきこもりが男性に多いというイメージは、「男は外で働くもの」「外に出ていない男性はおかしい」などという固定観念によるものと思われる。
- ・それと比べ女性のひきこもりが見えにくく、また心配されない原因は「子育てや介護などの家庭内労働のため家にいて当然だろう」「パートやアルバイト、非正規労働であるため外にいる時間が短く家にいるのだろう」、特に一番は「親や夫に食べさせてもらっているのだから困っていないだろう」などという社会の思い込みにあるのではないか。
- ・「親や夫との関係がうまくいっていないけれど経済力がなくやむなく家事労働をしている」「セクハラやDV、性暴力の被害に遭い外に出られない事情がある」などの孤独や悩みを抱えているものの、生きづらさを相談できる相手や友達のいない女性がいることを知ってほしい。
- ・調査によっては、男性より女性のひきこもりの方が多いという報告もある。
- ・会の発足に至るまでについてお話しする。2019年にエル・ソーラ仙台で行われた「ひきこもり女子会」という企画があり参加した。定員30人のところひきこもり経験者やその家族など60人以上が集まり、その人数の多さに驚いた。その場で連絡先を交換した4~5人とその後何度か集まる中で、仙台でもひきこもり女性の居場所を作ろう、ということになった。
- ・女性だけが安心して集まれる場所として、昨年4月にエル・ソーラ仙台の自助グループ支援事業対象団体となり活動を始めた。会の名称は、なんの集まりなのか分かるよう、あえてひきこもりという言葉を使った。運営メンバーは4人。
- ・会の広報としては、仙台市内の公共施設によるチラシ配布、せんだい男女共同参画財団HP、ひきこもり UX 会議のツイッターなど。
- ・会の活動状況についてお話しする。平日の午後の開催ということもあり、参加者は20代から40代がほとんど。
- ・(6月)7日(火)は、初めて定員を超えて11人の参加があった。参加者の参加理由は、「滅入

ったり落ち込んだりした時どうしているか知りたい」「つながりが欲しい」「悩みを話したい」「仕事関係以外の人と話したい」「どんな会なのかを見に来た」など。会の中では、気分が落ち込んだ時の対処方法を話したり、おすすめやお気に入りの本を話したりし、話が弾んだ様子だった。

- ・今後の目標についてお話しする。せっかく仲間づくりに来ているのだから、外で会ってみよう、という提案をしている。一人ではやりたくてもできない、バーベキュー、芋煮会、お花見などを企画していく予定。
- ・課題認識についてお話しする。ひきこもりと一口に言っても、うつ状態で誰とも会いたくない人、今日は一歩も外に出なかったという人、家と職場の往復だけという人など、さまざまである。参加者の中には、何らかの精神疾患をお持ちの方も。就労や資格取得、精神科の通院など、解決策を求めて参加される方もいるが、なかなか答えられないため、分かる範囲で女性の相談窓口を紹介している。
- ・社会に受け入れられず孤独や悩みを抱え苦しんでいる女性の居場所となれるよう今後も活動を続けていく。

○市長

- ・続いて、宮城野区 BBS 会に願います。

○宮城野区 BBS 会 森氏

- ・副会長として会長の代理で参加させていただく。
- ・BBS は、「Big Brothers and Sisters Movement」の略であり、約 100 年前にアメリカで誕生したもので、日本では 70 年前くらいから始まった。非行少年や社会になかなか適応できない子どもたちと一緒にボランティア活動等を行いながら、社会に適応していく手助けをしていくもの。
- ・県や青葉区の BBS 会は以前から活動していたが、宮城野区 BBS 会は 2019 年 10 月 4 日に発足した。県 BBS 会の会長が、さらに活動を広げていきたいということで、会長の務める保護司や極真会館師範に関する人脈に加え、福祉大の学生たちの BBS のサークルも加え発足した。社会人と福祉大の学生、合計 15 名の会員で成り立っている。
- ・課題としては、知名度があまりないこと。また、発足はコロナが流行る前であり発足式はマスクなしで行えたが、すぐにコロナが流行ってしまい、本格的な始動ができていないのが現状。
- ・本来の主な活動はともだち活動。非行少年等と楽しいグループワークを行うもので、現在はコロナで出来ていないが発足当初は登山を行った。
- ・そのほか学習支援を行っている、学生に協力いただき、非行少年に勉強を教える事が今の主な活動となっている。勉強でつまずいて学校に戻ることができないなどの学力と非行との関係性が見えてきて、学習支援が再犯防止に役立つと学んだ。本来であれば机を横並びにして勉強を通して交流するという形が理想だが、コロナによりオンラインでの学習が主となっている。
- ・そのほか、「社会を明るくする運動と連動しての活動」や東北大 CARP と共催した「あいさつパトロール」も行った。自分が参加したのは「年末石巻復興ボランティア参画」。宮城県 BBS 会と和歌山県 BBS 会の震災後の交流が発端となり、ミカン狩り運動会が始まった。コロナの影響で縮小していたが、昨年末に関しては盛大に行えた。
- ・コロナでともだち活動ができておらず、会員同士の人間関係が希薄になってしまうことを危惧

し、夜回り活動を週に1回榴岡公園で始めた。不審なことはないか光る警棒を持って見回るもの。

- ・また、昨年「今生きづらさとどう向き合うか」をテーマとした研修会を開催した。
- ・学生と非行少年との交流が一番大事だと考えているが、大学で学外活動が禁止されていることもあり、本格的な活動が出来ていない。
- ・ただ、精力的に活動したいという思いがあることを是非知ってもらいたい。

○市長

- ・続いて、NPO 法人アスイクにお願いする。

○アスイク 大橋氏

- ・東日本大震災をきっかけに立ち上げた団体で「復興後にやってくる明日のために教育を」というところからアスイクという名前を付けた。避難所の中で子どもたちの学習支援をしたり、仮設住宅で居場所を作るなどの活動から始めた。
- ・活動を続ける中で、震災の前から生活に困っている方が少なくない状況を見てきた。震災により問題が顕在化されていると感じ、子どもの貧困問題へと業態をシフトさせていった。
- ・学習・生活支援事業は2013年から仙台市と協働して立ち上げたもの。学習支援や、企業や地域の方と協働して子どもたちに不足するいろんな機会を作っている。相談支援は、子どもたちと関わる中で、外からは見えない家庭の中の色々な問題が見えてきて、背景にある子どもたちの環境にもアプローチする必要があると考え実施している。
- ・つながりにくい家庭や子どもたちとつながっていくために、地域の様々な機関、学校や民生委員、生協さんなどと協働しながら運営を行っている。ボランティアは400人以上が関わってくれている。
- ・高校生になると、性的な問題や自殺未遂など、行動も過激になってくることも少なくなく、それが中退につながることも。中学生から高校生まで一貫して関わって、何かあったときにサポートしていく体制を作っている。
- ・不登校のお子さんは非常に多く、学習・生活支援事業の参加者だけでも10%以上は不登校に該当している。仙台市の調査でも、経済的困窮世帯の3割近くは不登校経験があるという衝撃的な結果もあった。貧困や家庭の問題が背景として確実にあると実感しているところ。
- ・2015年からフリースペースを運営、2019年からは仙台市のふれあい広場と協働し、市内3箇所にスペースを設置している。約100人の登録者のうち2割くらいは虐待などの背景を抱え児童相談所が関わっているケースである。児童虐待の相談件数は増えているが、施設に措置されるのは一握り。だいたい是在宅の見守りとなっているが、家での親との関係がうまくいかず学校でも問題児扱いされて結果的に不登校になるなどのお子さんが、いろいろなところからつながれてくる。
- ・コロナ禍で、関わっている家庭から経済的に困っているという声が寄せられたため、リスクの高い家庭にはソーシャルワーカーが見守りも兼ねて、緊急支援的に食品をお届けした。連絡が付かなかった家庭とも、食品を切り口にするとうつながることができることができた。家庭に伺うため子どもの生活の実態も分かり、非常に有効だと感じ、自前でフードバンクを立ち上げたり、仙台市との見守り強化事業も始めた。
- ・行政に対しての拒否反応をお持ちの方など行政ではなかなかつながれない方へのアプローチ、

という意味でも、自分たちの活動に価値はかなりあると感じている。放っておけば命に関わる、もしくは事件になってしまうようなケースも、昨年1年間の間にも数件あった。

- ・アスイクBOXという食品回収事業も、SDGsの絡みでいろんな企業が協力してくれている。
- ・今年4月に中田町において認可保育所の運営を始めた。2020年からは、元々は仮設住宅のあった場所で荒井児童館の運営も始めた。
- ・このように、私たちがハブとなり、いろんな切り口で生きづらさを抱える子どもや家庭と市民や企業、行政とつなぎ合わせていくことをやっている。
- ・課題認識として市長にどんなことを伝えたいか職員の会議で募った結果についてお話しする。
- ・子育て支援に関心のある母親の活躍の場づくり、ということで、子育てがひと段落した方の中には、自分が今度は子育て中の保護者を支えたいという思いをお持ちの方がけっこういる。ただ、資格等は持っていない。例えば子育て支援員も倍率が高く、取った後も仕事に結びついていないか疑問という声も。保育所側も、配置基準を満たしたとしても、サポートの必要なお子さんがいたりなど、運営が難しい現状がある。思いのある方をなにかしらの研修で育てる場があり、保育の現場とつながり働けるような仕組みがあると良い。
- ・不登校・ひきこもり支援に関心のある当事者を育成する中間的就労の仕組みづくり、ということで、当事者の中には、自分も将来そういった子どもたちを支える仕事がしたい、と相談してくることも少なくない。例えば、家庭にアウトリーチする際に一緒に来てもらい子どもたちと関係を作ることで、将来そういう仕事をしたい子どもたちにとってもいい体験の機会になるのではないかな。なお、できればアルバイト程度のお金が発生すると、仕事をしているという実感につながりやすいと思う。
- ・在宅援助の子どもたちの居場所が足りない実感があるため拡充する必要がある。今回の児童福祉法の改正でも動きがあるため、制度や法律に基づいて運用していく形か。
- ・自分の親の大変そうな状況を目の当たりして、自分は働くのは嫌だ、という意識になる子どもたちがいる。そういう子どもたちに違ったロールモデルを見つけてもらう場が必要だと思っている。この点については、自分たちももっと頑張らなくてはならないと考えている。
- ・(本日出席している)吉田は相談支援のリーダーとして最前線でいろんな声を受けているため、気になることはご質問いただきたい。

○市長

- ・続いて、NPO法人Switchにお願いします。

○Switch 小関氏

- ・私たちの活動は、「Switch on Your Life」、もっと自分らしい生き方へ、障害のある人も無い人も、すべての人が自分らしく学び、働ける世の中を目指して、そして、多様性を許容しあえる社会づくりへ挑戦している団体。
- ・心の不調や生きづらさ、社会的困難を抱えた若者の働きたい、学びたい、就労、就学を支援している。
- ・団体の設立は2011年3月2日で、震災の1週間前に立ち上がった団体。先が見えない不安な時代の中で、心の問題で元気を無くしてしまう人がこの先増えてしまうだろうということで、何かできないかと思い、心の障害を持った方の就労支援をしようという事で準備をしていた。今はたくさんある就労移行支援事業所だが、我々は仙台の東口で初めて居を構えた団体であ

- る。
- ・震災により自分たちの無力さを感じ活動を一時休止した。その後、代表の高橋が被害が大きかった石巻や南三陸町でボランティアを続ける中で、働くことや学ぶことに特化した支援が必要なことを痛感し、活動を再開した。
 - ・精神保健福祉士や社会福祉士、キャリアコンサルタントなどの様々な資格を持つ専門性の高いスタッフのほか、様々な企業等で働く経験をした社会経験豊かなスタッフも一堂に携わっているところが私たちの強みだと思っている。
 - ・障害福祉サービスの中で、既存の枠の中ではどうすることもできない方々にたくさん出会った。制度を使えない方々の支援も必要と考え、ユースサポートカレッジという事業所を立ち上げた。
 - ・スイッチ・センダイやスイッチ・イシノマキは、障害福祉サービスとして通院されている方や手帳をお持ちの方が利用できる施設であるが、そうではない方々の多様な支援の場所として、ユースサポートカレッジの仙台 NOTE と石巻 NOTE を立ち上げたもの。
 - ・大人になって心の不調を抱える前にもっと早い段階で介入して予防すべく、高校と連携して、高校の中にカフェを作ってそこで学生と接する事業や、外に出られない方に会いに行くアウトリーチ事業も行っている。
 - ・データから見える課題として、精神疾患や発達障害を抱えた高校生や大学生が増えていること、産業構造の変化など様々な要因により障害者が増えてきていること、発達障害グレーゾーンの存在と支援の必要性、世界と比べた日本の若者の自己肯定感の低さ、若者に長期失業者が多いこと、父子家庭・母子家庭の子どもの非行率や貧困率が高いことがある。
 - ・まとめると、ルールから外れやすく戻りにくい社会構造があることにより、若者が未来を見通すことが難しくなっているのではないかと考えている。
 - ・昨年度、ビジョンミッションを「私たちは、未来ある若者が希望を持ち、多様な価値観を尊重し合える well-being な社会を目指します」という文言に見直しをした。そのほか、さらに4つのミッションをスタッフで考えて活動をしている。
 - ・活動の軸は「障害福祉サービス」と「ユースサポートカレッジ」の二つ。「障害福祉サービス」は心の不調や病をお持ちの方の就労支援と自立支援、「ユースサポートカレッジ」はなんとなく心が不調だとかひきこもりがちなどの若者への支援を行っている。コロナになり、オンライン授業に適応できなかつたり調子が悪くなって休学した大学生の利用が増えた。11年間で約2,000名の方が利用した。
 - ・「ユースサポートカレッジ」は、さまざまなプログラムを行っている。人気のアート活動のプログラムのほか、社会のつながりを作るためのミニインターンシップも行っている。専門学校や介護施設などに出向いて社会とつながる活動をすることで自己効力感が高まり、次のステップに結びつくケースも。
 - ・私たちの活動には企業の理解も大事。賛同いただいたたくさんの企業に協力いただいている。
 - ・事業の中で様々な感想をいただくが、「生きる力をいただきました」という感想をいただいた際には胸が熱くなった。
 - ・大学生の自死予防活動にも入っており、ゲートキーパー養成事業も行っている。
 - ・現在の課題についてお話しする。長引くコロナ禍で更に若者の孤立や心の不調、不登校、ひき

こもり、中退、自殺率の増加など、様々な社会課題をひきおこしており、若者・女性のメンタルヘルス支援、居場所付き就労支援が急務となっている

- ・自殺率は男性の方が女性より多いが、男性は11年連続で減少しているのに対し、女性はコロナ禍で増加している。若者の自殺率もコロナ禍で上昇している。日本の若者の死因の一位が自殺であり、他の国にはない現状で、何とかしなければと思っている。
- ・大学生の課題について、入学式からオンラインでゼミのつながりもなくコミュニケーションが希薄となり、孤独や孤立が深まり気力や自信の低下につながっている。また、アルバイトで生計を立てていた方の収入が減少し、大学を辞めようかと悩み始めた休学中の方のユースサポートカレッジの利用が増えた。
- ・そんな中でなにができるか考えいくつか対策を始めた。学生の自殺率が高い時間帯である夕方・夜間の相談窓口を設置したり、大学の近くに出張カフェを作って就労相談などをしたり、オンライン上の居場所を作ったり、農業体験の中でECサイト作りやドローンを飛ばすなどの強みにつながるようなものを身に付けるための事業を行った。
- ・未来ある若者が希望をもって生きることができる社会を目指して、一緒に手をつなぎながら、誰一人取り残さない仙台市の街づくりに貢献していければと思っている。

○市長

- ・各団体の皆様に改めて感謝申し上げる。
- ・ひきこもりLadyの会について、女性のひきこもりは気づかれにくいというお話から入られ、せっかく外に出てきたのだから楽しいつながりを持つとう、ということで、大きな力になっているのだろうと実感した。
- ・宮城野区BBS会について、活動が始まったとたんにコロナになってしまったということで、それでも非行少年少女の見守りなど、ご自身の活動の意義に基づき続けられていることについて、深く感銘を受けた。
- ・アスイクについて、東日本大震災後の経験に裏打ちされたお話だったと認識している。あの折にも家庭環境によって大きな差が生じた、と言及されたが、今回のコロナにおいても同じことがあるのだと認識したところ。
- ・Switchについて、長い活動の中でお気づきになったことやそれぞれの状況に入って育成にお努めいただいていることについて、心強く聞かせていただいた。
- ・違った背景がある一人ひとりがどのように自分らしさを発揮できるのか、ということについて、皆様が寄り添われて活動されているのだと認識した。改めて、居場所があり、活躍の場を実感することが、それぞれの成長にとっても人生にとっても、より良いものになるのだろうと実感したところ。
- ・この後もディスカッションさせていただく。

5 意見交換

○市長

- ・意見交換に入る。進め方として、先ほどの皆様からのご説明を受けての感想や質問を団体ごとに行い、その後フリーで意見交換を行うこととしてよいか。

《異論なし》

○市長

- ・はじめにひきこもり Lady の会について、私から質問させていただきたい。外に出るきっかけ、どんな後押しがあると外に出て活動に踏み出せるのか、感じることなどあれば教えていただきたい。

○ひきこもり Lady の会 堀江氏

- ・(6月)7日に例会があったが、その中でも、朝の散歩やウォーキングをしているという若い女性の声があった。一人で出られる、ということで、それが良いきっかけとなり、その後のイベント参加等の外出につながる模様。
- ・一歩踏み出してしまえばおっくうではなくなるが、その一歩が重たい。
- ・7日の例会では、皆さん図書館に行っているとのことだった。私たちのイベントの中で、この本いいよ、などの情報交換が行われることで、図書館や本屋に行くきっかけになっている。誰かと一緒に何かをする、自分からどこかに行くのは勇気がいるが、そのような形であれば「図書館に見に行こうかな」となる。

○市長

- ・女性のひきこもりは分かりにくいとの話があったが、潜在的に女性のひきこもりの方々はどのくらいいるのか。

○ひきこもり Lady の会 堀江氏

- ・江戸川区の最近の調査で、半数は女性という結果が今朝の新聞に出ていた。
- ・自分がひきこもりだと思えばひきこもりであって、家に籠っているケースだけがひきこもりではない。出かけているけれども誰とも会話をしない、というケースでも、その人にとってはひきこもりであると考え。はたから見てもひきこもりかどうかは決められるものではないが、買い物に行ってるからひきこもりじゃない、などと思われがち。家に何時間いるからひきこもり、と捉えられるものではない。

○市長

- ・気づきにくい視点でのお話をいただいた。市民局長はいかがか。

○市民局長

- ・就労支援について、女性の相談窓口をご紹介するという話があった。専門の団体や機関につながり、いよいよ、やっとの思いで来られた方をつないでいく難しさがあると考え、そのあたりはいかがか。

○ひきこもり Lady の会 堀江氏

- ・精神疾患をお持ちの方もいらっしゃる。家事をしているけど家族以外に話をする人がいないとか、就労継続支援A型B型を利用するもの自分が行くところではないと考え、一般のスーパーに就職するが続かないという方もけっこういる。
- ・エル・ソーラの女性相談も皆さん利用しているようだ。
- ・精神疾患をお持ちだということについてのご自身の把握具合、精神障害者福祉手帳や障害基礎年金の申請の有無、8050問題に直面しているか、などのさまざまな困難の状況について、直接はなかなか聞けない。

- ・利用できる福祉制度があるものの、「自分は精神疾患ではない」「自分の病状を分かってくれる病院がない」と考える方も。精神疾患だからこういう制度がある、とは言いにくい。

○市民局長

- ・団体の運営上、必要な支援はどのようなものがあるか。

○ひきこもり Lady の会 堀江氏

- ・エル・ソーラ仙台の自助グループにはなっているが、施設使用料やチラシの作成代も自腹となっている。いつも赤字状態なので、登録団体には年に3,000円でもいいので助成があればありがたい。

○市民局長

- ・参考とさせていただく。

○市長

- ・続いて宮城野区BBS会に私からお聞きしたい。
- ・BBS会の活動で関わっている、非行を犯してしまうお子さんたちの背景をどう捉えているか。

○宮城野区BBS会 森氏

- ・自身の経験として、人と人との関わりが希薄になると社会では生きづらいつと感じた。BBS会ではないが、お兄さんやお姉さんで行う清掃活動等のボランティアや登山等のアウトドアによる人と人の関わりや、空手の稽古の中で自分の弱さを見つめ直すことができたことに救われた。
- ・BBS会も、気軽にお兄さんお姉さんたちといろんな活動に参加できる場を設けたいと思っている。人と人とのつながりを築けず人の気持ちが分からない、であるとか、なぜ社会で生きていかなければならないのか、という孤独感を緩和できれば、と思っている。

○市長

- ・大人の再犯率はとても高く、少年犯罪も数は少なくない。どのように大人たちが関わるかによって、子どもたちが救われていくのだと思う。このあたりについて何が重要と考えるか。

○宮城野区BBS会 森氏

- ・今現在は学習支援を行っている。少年院でも資格取得の仕組みがあるとのこと。社会で活躍できる能力を身に付けること、学力向上や資格取得などが再犯防止につながると思う。
- ・保護司より「この子に空手を教えてくれないか」という話をもらったことがある。暴力事件を起こした子だった。極真空手は実際に当てるもので、空手の技を教えたり組み手を行ったりした。空手を通して自分の弱さを見つけ、それを乗り越える課題も見つかったのかな、と感じた。
- ・社会に役立つ能力を何か一つでも伸ばしていくことが、社会に求められているという実感やモチベーションにつながると思う。

○市長

- ・健康福祉局長はいかがか。

○健康福祉局長

- ・異年齢集団の活動において、今後の課題があれば教えてほしい。

○宮城野区BBS会 森氏

- ・非行を犯した子どもたちとの関わりは、発足したばかりで、経験が少ないところがある。実際に活動を行って子どもたちと関わる中で、その効果を実感していく必要がある。

- ・少年院に見学に行った際、昔 BBS 会に所属していたという刑務官に出会ったことがある。学生は非行少年との関わりを学んでいきたいという前向きな姿勢でありとても頼もしく、不安には感じていない。

○健康福祉局長

- ・コロナの感染が落ち着いてきたように見えてきた中で、これからの活動の展望やポイントについて教えていただきたい。

○宮城野区 BBS 会 森氏

- ・他の BBS 会にはない色が空手だと思っている。必要な道具がないためすぐに始められる。人との関わりが少ない方など、声を出す場面が少ない方にとって、自分からこんなに大きな声が出るんだ、という気付きにもなる。精神的にも体力的にも活力が湧く。社会に出たときに必要な、挨拶や人の話を聞く姿勢、集中力なども身に付く。

○市長

- ・次にアスイクさんに伺いたい。ヤングケアラーへの取り組みは、本市としても本格的に取り組んでいかなければならないと考えているが、どんな取り組みが必要と考えるか。また、子どもたちへの対応の中で、望ましい支援のあり方の例などがあれば教えてほしい。

○アスイク 吉田氏

- ・学校の先生など気づいた大人に声をかけてほしかったという思いがある。子どもたち自身がネットの情報を得てはいるが、正しいかどうかは分からない。周りの大人がどんな声掛けをするかがポイントだと感じている。
- ・今後の支援のあり方としては、教育との連携が課題の一つ。個人情報の兼ね合いもあり、学校にどのように伝えていくかが難しい。結果的に問題が大きくなって学校との連携が始まることがあるため、問題が小さいときにどのように連携していくのか、という課題がある。

○市長

- ・子供未来局長と教育長はいかがか。

○子供未来局長

- ・子どもたちの居場所について、子どもが成長する時々に応じた居場所が必要だろうと考えている。成長していく過程を通して支援をつなげていくためにどのような視点が重要と考えているか。

○アスイク 吉田氏

- ・おそらくどの団体も感じていることだと思うが、年齢ごとに制度や法律により使える支援が異なり、居場所につながらない子どもが生まれてしまうように感じる。
- ・活動する中で、18 歳から 19 歳の子どもの支援が手薄だと感じることが多い。児童福祉法による支援や児童相談所の関わりを離れた後のつなぎ先が課題だと思う。

○子供未来局長

- ・当局においても今後の課題だと感じている。切れ目のない子育て支援を考える中で、学校とのつなぎ方について、特に福祉的なところのアプローチをどうすればいいか分からないとの学校の先生の声もある。つなぎ方についての仕組みを団体の皆様とも協力しながら作っていただければ、と考えている。

○教育長

- ・学齢期の児童生徒はかなりの時間を学校で過ごすこともあり、学校の先生の気づきが大事だと思っており、教職員に向けての研修等に取り組んでいる。
- ・福祉的な支援が必要な子どものつなぎ方について、問題が小さいうちから情報が共有できれば、子どもたちにとっていいことだと思う。
- ・ロールモデルが少ないとの話があったが、手本となる大人との出会いについて、今後に向けての構想等があればお教えいただきたい。

○アスイク 大橋氏

- ・今年年間 400～500 人のボランティアの方が関わってくれている。7 割は学生、3 割は社会人であり、この中でも出会いや気づきがあればいいなと思っている。
- ・コロナで出来にくい状況だが、地元の企業と協働する中で、飲食店やペットショップの仕事を体験する場を設けており、コロナ後には力を入れていきたいと思っている。SDGs の兼ね合いで、企業側も取り組みに協力するインセンティブが働きやすくなっており、さらにそれを後押しする何かがあればより協働しやすくなるのではないかと考えている。
- ・SDGs は強力だと感じている。それがあるからやる、という企業も多い。うまく使っていきたいという気持ちがある。

○教育長

- ・当局も自分づくり教育などの取り組みを行っているが、皆様との連携により、きめ細かく子どもたちに応じた取り組みを進めていきたい。

○市長

- ・最後に Switch さんに質問させていただきたい。生きづらさを抱える女性や若者が福祉以外のどのようなサービスを欲しているのか、何か例があればお聞かせいただきたい。行政としてこうあるべき、といった話ももしあれば。

○Switch 今野氏

- ・生きづらさを抱える女性や若者に、日々の活動の中で接している。今は居場所事業に力を入れており、高校の中での居場所カフェ事業だとか、今年度の新たな取り組みとしてオンライン上の居場所事業を準備している。
- ・これまでの相談や講座、個別の伴走支援などでは出会えない若者たちがたくさんいることが見えてきて調べてみたところ、家にいて、外での接点はないがネット上で彼らの人生が進んでいる状況が見えてきた。そこで、オンライン上の若者の居場所を作り、居場所の中で伴走支援のチューターを育成していきながら支援する仕組みを作ろうと取り組んでいるところ。
- ・今年度は、これまでなかなかたどり着けなかった若者とどうつながるか模索しながら動いていきたいと思っている。これまでなかったようなつながりへの手段があるとすごく面白いと思って活動しているところ。

○市長

- ・昨今は IT の技術進歩が目まぐるしく、本市でも DX を使った取り組みを進めているところ。支援が必要だけど見えない人たちにつながっていくツールとして、デジタルなり DX なり SNS なりが重要との認識だと思う。
- ・経済局長はいかがか。

○経済局長

- ・当局はキャリアコンサルであるとかキャリアアップ、就職や転職に向けた支援を行っている。
- ・コロナによってDXなどが進んでおり、企業が求める人材の質が変わってきている。国や自治体でもキャリアアップに向けたさまざまな支援を行っているが、こういった形に転換していく必要があると考えているか。

○Switch 今野氏

- ・若者を農村や企業に送り込んでDX人材を育成していくことを現在計画している。
- ・DX人材の育成というと、元々はプログラマーやエンジニアの育成など大がかりなイメージを持っていた。実際には、農業の生産者の現場で簡単なエクセルのマクロを組めるなど、身近なところでDXを活かせる人材が求められている。そのため、ちょっとしたITスキルを活かして生産性を上げていけるようなトレーニングをできればと思っている。
- ・今回は、実際に農業の生産者のところに行き、生産に携わりながらその農家のECサイトを製作するというプログラムを組んでいる。
- ・大がかりなものを作るというよりは手ごろなところから取り組めるようなDX人材の育成というものがもっと広がっていくといいのかなと思っている。

○市長

- ・まだまだお話を伺いたいところだが、時間もそろそろ、というところ。

○ひきこもりLadyの会 堀江氏

- ・1点だけお伝えしたい。
- ・5月7日の地元紙に「宮城の中高生でズボンの制服広がる」という記事が取り上げられていた。
- ・私の住む地区では在校生も新入生もすでにズボンが導入されているが、知人の娘さんが通う学校では話も出ていないとのこと。その娘さんは、いつからズボンになるんだろう、早く導入してほしい、と言っている。学校に要望しないとズボンが導入されないのか。このままだと学校に行きたくない、不登校、女性の生きづらさを生むのではないか。
- ・生徒から要望がないから、ではなく、すべての中学校・高校でズボンを早急に導入していただきたい。要望であり答えは知らないが、ぜひお願いしたい。

○市長

- ・その人その人が自分の姿を当たり前に表示できる社会が重要なのだと思う。先ほどの議論の中でも、多様性を尊重といっても理解が進んでいないのではないかと、といった話もあった。そういう意味でもまだまだ足りないところはあると思うが、いろんな方々がそれぞれらしく活躍することが、街全体の活力を生み出し、強い街にしていくのだと思う。ご指摘の点も踏まえたうえで、今後に向けて考えてまいりたい。
- ・貴重な時間をいただき、感謝申し上げます。

6 閉会

○男女共同参画課長

- ・限られた時間の中で活発なご議論をいただき感謝申し上げます。
- ・以上をもって令和4年度 第1回 女性・若者活躍推進会議の一切を終了する。